



TITLE:

<大會抄録>漢代の軍功賜爵

AUTHOR(S):

藤田, 高夫

---

CITATION:

藤田, 高夫. <大會抄録>漢代の軍功賜爵. 東洋史研究 1993, 52(3): 518-518

ISSUE DATE:

1993-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154455>

RIGHT:

## 大會抄錄

## 漢代の軍功賜爵

藤田 高 夫

漢代の爵制に關して、かつて西嶋定生氏が、漢代の「民爵賜與」の分析から爵が民間秩序の形成に果した機能を想定し、そこから皇帝權の公的性格を導きだそうとしたことは、周知のとおりである。

しかし、爵が與えられる機會は、西嶋氏も指摘しているように、國家の慶事などに際しての「民爵賜與」以外にも、實爵や徙民によって與えられる爵、さらには軍功に對して與えられる爵（軍功賜爵）があった。

本發表は、こうした賜爵のうち軍功賜爵をとりあげ、漢代の軍功賜爵がどのように行なわれていたのかを論ずる。主として検討するのは青海上孫家寨一一五號墓出土簡牘であるが、出土資料の常として、まずこの簡牘の性格を確定することが必要となる。

その上で、漢代の軍功賜爵の實態とそれが爵制全體においていかなる位置を占めるかを考察し、さらに爵の持つ意義を検討してみた。

## 唐代洛陽城の都市社會構造

妹尾 達 彦

古くからの豊富な研究蓄積を有す長安に比べると、隋唐洛陽史の研究は、殘された文獻史料が質量ともに不備なこともあり、充分進展しているとは言えない狀況が、長い間續いてきた。しかし、近年における、洛陽出土の大量の墓誌の公刊と、考古學調査の一層の進展は、洛陽史の研究環境を一新させており、重要成果が相繼いで誕生している。

本報告は、このような近年の動向を踏まえて、長安城の事例を参照しながら、洛陽城の社會構造に關する初歩的な考察を試みるものである。その際、まず、清・徐松『唐兩京城坊考』以來、今日に至るまで繼續的に進められている、唐代洛陽城の居住者の史料整理の現段階を明確にし、次に、隋から北宋に及ぶ洛陽城の城郭建築の變化と、官人居住地、各種官廳・商店の立地の變遷との相關性を探り、唐前期と唐後期の相違を指摘してみたい。

洛陽城の一特徴は、唐末に壊滅して二度と都となることのない長安城と異なり、五代を経て北宋に至るまで、斷續的に國都の一つとして存續していることである。そのために、洛陽の都市構造の變遷を追うことで、唐から宋への社會の變化の一端を具體的に跡づけることが可能となっている。本報告では、唐以後の洛陽城の變遷に關しても、簡単に觸れてみたい。